主日の福音 2023/10/22(No.1261)

牢屋の窄殉教祭(マタイ 5:1-12a)

どんなささげかたを求められても「神のものは神に返す」

山上の説教で語られる「幸い」は、神に与えられた人生をどのように神にお返しするか、たとえば悲しむ人と共に悲しむ生き方でお返しする人は幸い。そう呼びかけているのだと思います。年間第 29 主日の福音朗読で言い換えるなら、「神のものは神に返しなさい」これです。

神にお返しする生き方にもさまざまな形があります。森の木々は、成長する中で枝を伸ばします。枝は、切ってもまた伸びます。枝を「神さまにお返しする一部分」と考えるなら、幹は保ったまま神さまにお返しすることができます。

ある人は、木の幹も神さまにお返しします。自分の人生があるのは神様のおかげなのだから、ありったけのものをお返しして構わない。幹の部分も喜んでお返しする人もいるでしょう。イエスが語る「幸い」はそのお手本です。生涯を、悲しむ人と共にする。柔和な態度を貫く。憐れみ深く生きる。最後まで心の清さを保つ。裏切られても、平和を実現するために努力する。

ここまで示した生き方は、木の幹までお返ししても生きられなくなるわけではありませんし、その人の時間も残されています。もし、もっと返しなさいと言われたらどうでしょう？その人の本来残されているはずの時間まで「神のものは神に返しなさい」と要求されたら返事ができるでしょうか。

ほとんどの人は、「時間まで手放す必要があるのですか？」と考えるでしょう。納得できない限り返せないと考えるでしょう。人間ですから、「私の人生の残りの時間を、こんな形で返せと言われても困ります」そんな場面もあるでしょう。

残酷とも思えるような形で「神のものは神に返しなさい」と言われて、人は従うことができるのでしょうか。それが「義のために迫害される人々」です。「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」（5・10）枝も幹も、残り時間も、神に返すことを求められたとき、答えられる人がいるのでしょうか。

神の求めに、英雄的な形で答えた人々がいます。私たちがここで記念している「牢屋の窄の殉教者たち」です。彼らは自分自身を、証し人としてささげつくし、お返ししました。持ち物をすべて取り上げられ、あるべき人としての尊厳も奪われた中で、この世を生きる時間も神に返したのです。これ以上のおささげがあるでしょうか。

ここに集まった皆さんは、イエスから「私のすべては神に与えられたものだから、最終的に神に返すべきだ」と信じて集まっている人々です。ただ、「無理のない範囲でお願いします」とも考えているのではないでしょうか。自然な形で神に返すことには納得しても、突然返すように求められたり、「迫害」のような、残酷な形で返すように求められると、「従えません」と考えてしまうでしょう。

今日記念しているキリシタンの先祖たちは、「あと一歩踏み込んだ生き方」で、神のものは神に返しましょうと模範を示してくれた方々です。「これくらいの柔和な態度は取れるけれども、これ以上はできない」そこをあと一歩踏み込んで、柔和に接してあげる。その時私たちは牢屋の窄の殉教者たちが守り抜いた信仰を生きることができます。

「ののしられ、悪口を言われても忍耐できる。けれども、身に覚えのないことまでは耐えられない。」それをあと一歩踏み込んで、耐え忍ぶ。こうして私たちは、迫害という理不尽な十字架を担い、焼き尽くす献げ物をささげた久賀島の信徒に倣って生きることができるのです。

一人の先輩司祭のことを話させてください。この先輩は予想もしなかった病気を告げられ、闘病しています。二週間前に電話をかけた時、私に心配かけまいとして気丈に振る舞っていました。生真面目で決して飲み過ぎたり食べ過ぎたりしない先輩がなぜ病気を患い、重い十字架を背負うのでしょうか。神様から人生をどのような形で求められても従う。この先輩司祭は殉教した牢屋の窄キリシタンに近い十字架と今向き合っている。中田神父はそう考えています。

納得して神に与えられたすべてを神に返していく。そんな人生ばかりではありません。枝だけでなく幹も返すように要求されて、牢屋の窄の殉教者たちはすべてささげました。「こんな形で返さなければいけませんか？」その求めに一歩踏み込んで、今この時にも自分をささげている先輩司祭がいます。

「天の国の幸いのために、このような生き方を貫いてください」との呼びかけに、「少しくらい自分の好きな生き方をさせてもらおう」と思いたくなります。けれどもここにいる私たちは、どんな生き方を求められてもうろたえてはなりません。一日ずつおささげしていきましょう。